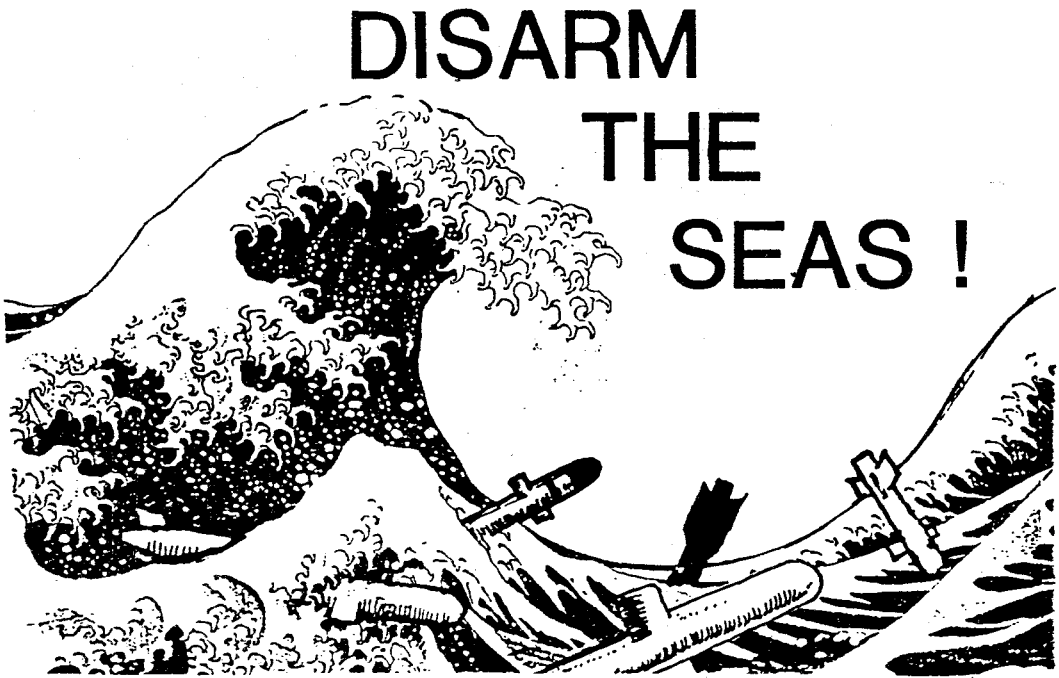


# 月刊反トマホーク通信 NO. 27

88. 1. 20  
定価 100円

東京都渋谷区渋谷 2-5-9 パル青山 502 トマ喰虫社 ☎03(498)6095  
044(63)5101



—— 海の軍備撤廃を！ ——

トマホーク艦

■ ファイフ、バンカーヒルの  
横須賀母港化を止めよう！

■ 非核独立太平洋マニラ会議の報告 ————— 梅林宏道

■ 核被害者世界大会に参加して ————— 木原省治

トマホークの配備を許すな！ 全国運動 —————

●維持会員（月間会費）

●参加会員（月間会費）

●通信会員

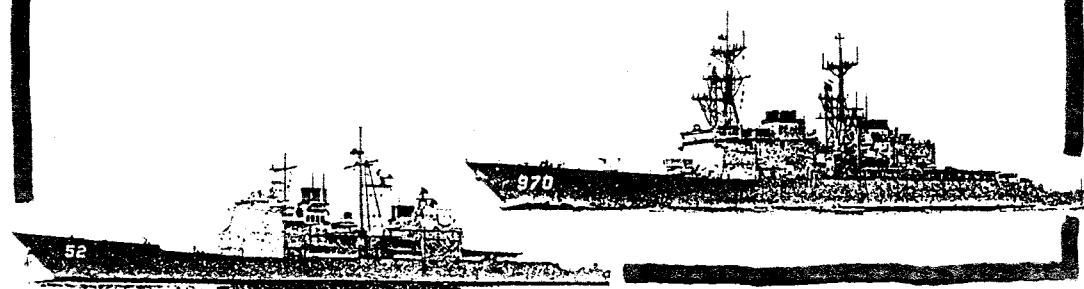
団体 1日 2000円  
個人 1日 1000円

団体 1日 1000円  
個人 1日 500円

年間  
2000円

——— あなたも仲間！

なんと！ 垂直発射システムのテスト艦  
今度は、バンカーヒルの母港化



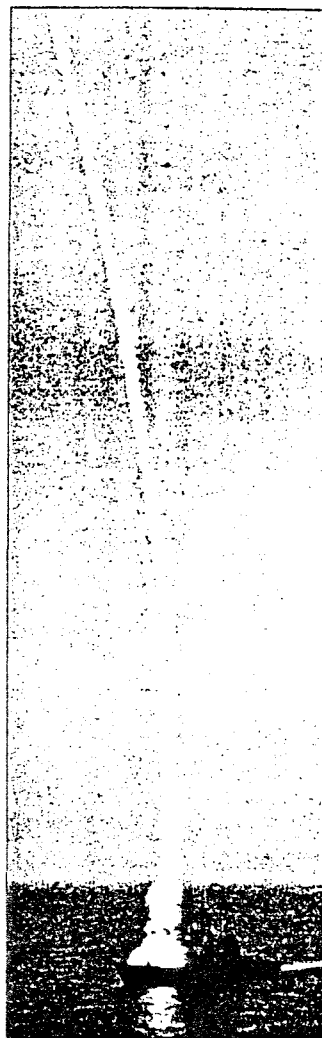
なんということだ。

一月十四日、米海軍はミサイル巡洋艦バンカーヒルの横須賀母港化を発表したのである。バンカーヒルについて、マスコミの取り上げ方は、どちらかというと「イージス艦（最新鋭の洋上防空システムを備えたミサイル巡洋艦）の配備」というところに比重が置かれている。たしかにそのこと自体も重大だ。しかし、「問題」の本命・かんどころは間違いない。「トマホーク」である。

すでに母港化が発表されている駆逐艦フアイフと同じく、バンカーヒルはトマホークを装着可能な垂直発射システム（VLS、六十一の発射管を持つ）を二基備えている。それどころか、この艦はVLSのテスト（八六年五月）に使われた、元祖、草分け的存在なのである。左の写真はその時のものだ。都合百八十三のトマホーク発射台が横須賀に据えられる。それが二隻の「母港化」の意味だ。

このVLSは「多目的発射装置システム」だから全てが全てトマホークとは限らない。八四年の米議会資料には、搭載予定のトマホークはファイフに四十五、バンカーヒルに二十六とある。この控え目な数字でいっても合計七十一発の海洋中距離核（INF）トマホークが日本に配備されるということなのである。陸上INFの世界規模での全廃合意に世界の平和世論がよろこびにわいた、この時にいや、「全廃」がじつは核を陸上から海洋に移すのにすぎなかったことがこれではつきりしたのである。恐るべき、そして怒るべきことではないか。

私たちの答えは一つ。「母港化を止めよう！」「これまでにやってきた全てのてだてをつくくして、そして新しいやり方に大胆に挑戦して、あらゆる非核・平和を願う人々と手をつないで、この国が手にしようとしている「悪魔の選択」を拒否しよう！



## 行動計画

## ● 出前学習会

母港化の意味は以外なほど正しくは伝わっていない。マスコミの取り上げ方も小さい。ならば我等が最大の武器「口コミ」だ。「首都圏運動」ではスライドと説明用マニユアルを作った。この二つを持ってドンドンでかけてゆこう。出前の注文はトマ喰い虫社へ。もちろん首都圏以外にも出張します。

●チラシ・パンフレットの配布――

横須賀ではパンフレット作製に拍車。新聞折り込みのチラシも、もう配られているはず。首都圏運動もリーフ作製中。

署名運動

夏までに100万人署名

米艦の  
母港化  
**反対団体  
世論に訴え**

巡航核ミサイル・トマホークを大量に搭載可能とされているアメリカの駆逐艦「ファイブ」にミサイル洋流艦「パンカーヒル」の横須賀母港化に反対する「横須賀をよもほ

ーク艦（ファイブ・パンカーヒル）の母港にさせない県民運動グループ（田内清代表）は十八日、百万人の署名運動や県民公聴会の開催などを柱とする県民運動を発表した。

田村代表らによると、両艦の横須賀への配備は、ファイブが今年九月まで、また、バンカーヒルは今年末までの予定。米海軍資料などによると、ファイブには六十一基、バン

このため、同グループでは、教員、弁護士、牧師ら六十四人が呼びかけ人となって反母港化運動の盛り上げを検討した結果、さる五十九年、「**核兵器県宣言**」が県議会で採択された際に匹敵する県民世

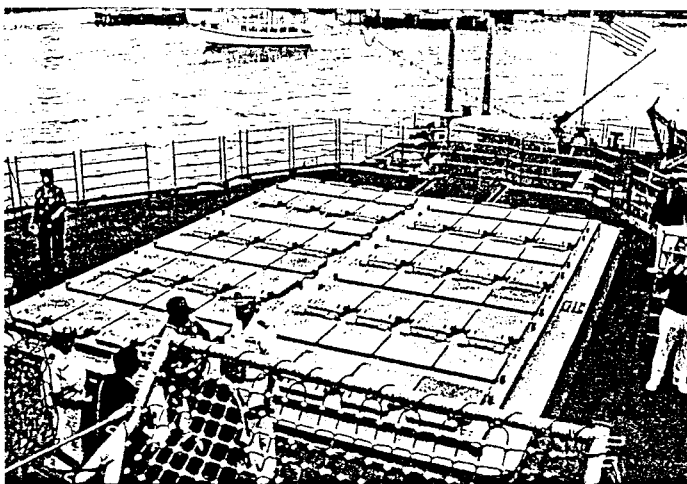
に呼びかけての署名運動は、  
豊島までに百万人を達成させ  
る計画。また、県、横須賀市  
に母体化を受け入れるかどう

カーヒルには百三十二基のトマホーク発射管が取り付けられており、現時点では米軍艦で最大のトマホーク搭載可能艦となるという。

論の盛り上げを図ることにした。

まず、県内の市民運動グループや労組などあらゆる団体

か態度決定を求め、各政党への公開質問、キヤラバン、集会、デモ、県民公聴会の開催も併行して行う計画だ。



↑  
バンカーセルのMK41垂直発射システム

188. 1. 19.  
読売新聞  
神奈川県地域ニユズ

議(87.11.5)の報告

# 非核・独立の日本へ 押し寄せる潮流

●梅林宏道

## 太平洋の島々から……

昨年（一九八七年）の十一月九日から十六日まで、マニラで開催された第五回非核独立太平洋会議に出席した。それより先五日から八日まで、先住民のみの会議が開かれていた。主催したのはPCCR（太平洋問題資料センター）で、一九八三年にバヌアツで第四回が開催されてから四年ぶりの開催であった。PCCRの運営委員会から「海の軍備撤廃を！太平洋運動」のホノルル事務局に太平洋の軍事化の現状と太平洋運動の活動を報告してほしいと依頼があり、結局私が行くことになった。PCCRの財政を助ける意味で日本でカンパを募り参加経費をまかなうことが反トマ運動で決まり、多くの方々から協力をいただいた。ここに心からの謝意を表わすとともに、報告の義務を果たしたい。また、非核・非同盟の日本への夢が鼓舞される、かけがえのない人々との出会いを、今後の私たちの運動に生かしてゆきたい。

限られた紙幅の中で網羅的な報告はできない。むしろ、私にとって印象的であったことをいくつか書きたい。それにしても、事実的な事柄を最初に要約しておく。

会場はマニラ中心地のリサール公園からそう遠くないピウス十二世センターというカンリック施設であった。私の宿泊も同じ。断水でトイレの水が流れないで何度か往生したが、それもこれまでのフィリピン経験でなれていたので気にならず、すこぶる快適であった。フィリピンに来るとやはり元気を回復する。

参加した地域は実に多かった。名前を聞くだけでも太平洋の香が漂う島々の代表が顔をそろえた。北マリアナ連邦、クックアイランド、フィジー、グアム、ハワイ、カナキ（ニューカレドニア）、キリバス、ニウエ、ソロモン諸島、タヒチ、トンガ、西パプア、西サモア、パプア・ニューギニア、マーシャルからの参加者がなかったのが少し寂しかった。今回の会議を成功に導いた事務局長のロベッティ・セトリ氏（トンガ）が、マニラ空港の入国管理局は、一度も見たことのない国の名前がパスポートにあるのでびっくりするだろう、と書いていたのが思い出される。

環太平洋の国々からは、先住民と非先住民が参加。日本からはアイヌの参加を準備できなかったことで大きな宿題が残った。会議参加者は投票権のある正式代表とオブザーバーなどに厳密に区別されたが、日本からの参加者の場合は事前の相談でその区別は便宜的な

ていただきたい。

## 全体的な印象

形式や権威にとらわれない自由な会議であった。軍人の反乱が絶えず懸念されるマニラの政情と父親が自分の身代わりに暗殺されたばかりのベラウのローマン・ベドル氏に象徴されるような厳しい闘争の中からの参加者が多いことのために、参加者の安全性についてとりわけ嚴重な配慮がなされた。また、人口が小さな島の人々が圧迫感を受けることなく対等な参加が保証されるように、参加者の人数や資格について厳密な基準が設けられた。にもかかわらず、参加者は対等な人格として尊重される風がしっかりとあって、いささかも権威主義的ではなかった。このようなとき、いつも日本の社会、そして運動の中にも染みついている権威主義が本当に何とかならないものかと痛感する。

多様な人種と民族の代表たちが、自分たちの直面しているあらゆる問題を語りあった。スウェーデンの外務省からの参加者が、会議の印象を「反核会議というより解放闘争の会議だ」と要約して語っていたが、確かにその



ものに過ぎないと話しあったので参加グループを区別なく列挙しておく。沖縄原水禁、原水禁、日本キリスト教協議会、カトリック正義と平和協議会、社会党、総評、反核パシフィックセンター、反トマ運動、平和事務所、東チモール支援委員会、進出企業を考える会。今回は、香港、韓国（在比、在米）、ヨーロッパからの参加もあった。ヨーロッパからは、グリーンナム・コモンの平和キャンプからの三人の女性、デンマーク平和財団、スウェーデン外務省の軍縮担当者などの参加が印象的であった。

参加地域は約三十。参加者は約百三十人。プログラムの概要は、

- ・ 歓迎会
- ・ 開会式 シスター・タンの式辞

タニアダ上院議員の基調報告  
地域代表による参加者の紹介

- ・ 非核独立太平洋憲章の再検討
- ・ 重点討論 ベラウ、フィジー、カナキ
- ・ 太平洋の軍事化
- ・ 政治介入と経済搾取、援助問題
- ・ 土地闘争、独立闘争、ハワイ、東チモール、アメリカ・インディアン、マオリ、チャモロなど

- ・ 決議採択

途中で半日、参加者とフィリピンの女性グ

(5)

傾向が強まっているのではないだろうか。ヨーロッパの反核運動と比較して、太平洋民衆の置かれている植民地主義の歴史は全く異なるものである。したがって非核化の問題が植民地主義との対決と一体化してゆく必然性はヨーロッパと比較にならない。今日、ペラウ、フィリピン、韓国、非核化とアメリカの干渉



の問題はそのことを端的に示している。会議の中で、韓国の代表がカナダの代表にカナダの解放闘争が非核化とどのように結びついているのか、と率直な質問をしていた。これは非核化と解放闘争の関係が一般的にはややわかりにくい例である。しかし、カナダの代表は、カナダ人の独立を認めないフランスの太平洋戦略の根本は南太平洋における核実験場を確保することにある、カナダの独立なしに仏領ポリネシアの島々の独立と非核化はないだろう、と明快に答えていた。アオテアロア（ニュージーランド）の反核運動と独立の関係はもう一つの例である。私の報告の中でも強調したが、一見独立国であるニュージーランドが非核政策を徹底しようとしたとき、アメリカ、イギリス（より間接的にはオーストラリア、日本）からの干渉はすさまじいものであった。それをね返す闘いは民衆の主権への尊厳に支えられた。

しかし、たとえばハワイ先住民の土地闘争、ウラン採掘と直接つながらない先住民の権利回復の闘争などの場合、これまで述べたような反核と独立の一体性の文脈とはまた異なる次元であることもまた否めないであろう。この辺に、非核独立太平洋運動について充分に整理されていない部分があることは確かである。私自身も、非核独立太平洋運動というの

は何なのだろうと会議の中で何度も自問した。「早く整理すべきである」とは思わなかった。しかし、非核独立太平洋運動の発展の中で、きつとその性格づけをめぐる討論がもう一度訪れてくるのではないかと印象を強くもった。

## 支援グループ？

非核独立太平洋運動とは何だろうか、という問いは、日本人として何故ここに居るのだろうかという自問でもあった。

「海の軍備撤廃を！太平洋運動」が、八八年のリンバック反対運動に言及した決議を提案したことに端を発して、ハワイの先住民代表が白人活動家への不信を露わに表明した場面があった。この場面は、今回の会議の中で色々な人々の対立や感情の機微が最も複雑に交錯し爆発した瞬間であった。不幸な情報の行き違いや誤解を含むこの一連の出来事を、ここで説明するのはむずかしいしその必要も無いと思われる。ハワイの先住民の態度に怒って議長をしていたローマン・ベドール氏が席を立ち、あゝ味の悪い会議の中断のあった翌日の夜、先住民と支援グループがそれぞれ

分かれて懇談する場が持たれた。パシフィック・センターの船田君と私は、この会に出て、オーストラリア、アオテアロア、カナダ、アメリカ、ヨーロッパの白人たち、韓国人たちとともに、「支援」とは何かをめぐって長い議論をした。とてもいい議論であったと思う。グリーンナムからの女性の一人とオーストラリアからの女性の一人は議論の途中で感情の高ぶりで泣き出す場面もあった。

単純に善悪の判断を私は下したくないが、このような話し合いの場を「先住民」と「支援」と抵抗なく二分する考え方が太平洋の運動にはある。アジア民衆と日本の運動との関係では、そこはそんなに単純ではない。日本の運動にも色々あるが少なくとも、今回の会議に参加している白人たちと似たような質の運動をしている日本の運動に関してはそうである。

私は自分の日韓連帯運動の経験を思い出しながら、日本の運動が「支援」と言う言葉を使わなくなった経過を説明した。また、金芝河が三・一アピールの中で「あなた方は私たちを救うことは出来ないが、私たちの闘いはあなた方を救うことが出来るだろう」と語ったことを引用し、私たちが受けたショックを語った。そして日本の運動は自分たちの国の根源的変革を志すことにおいて、解放闘争と

連帯するという考え方を育ててきた、と語った。拍手があった。

と同時に、それは成功していない、と語らざるを得なかった。そして、八〇年代の日本では、どちらかと言うと気負わずに「支援」の役割に身をおく若い世代の意識が主流になっていたことを紹介した。私は内心では、「支援」であっても、自国の政府への局面、局面でのコントロールを失っていないヨーロッパの民衆に較べて、あまりにも悲惨な日本の運動の状況を思っていた。若い韓国人は、「金芝河の考え方はよく理解できる。しかし、あれは七〇年代の考え方だ。私たちはいま支援を必要としている」とあとで話しかけて来た。彼は、陽気でパンカラな男で、ハンカチでマスクをしてアメ大へのデモに参加したが、途中でマスクを捨ててしまった。

## フィジー

準備段階から、今回の会議はフィジー問題でもめると聞いていた。南太平洋の先住民の運動家たちの間で、現フィジー政権の評価を巡って深刻な意見の違いがあり、ランブカ・クーデター政権を支持する運動家がマニラ会



議に出席するとの報も入っていた。「太平洋の軍事化」について基調報告するわが身としては、フィジー問題をどう描くかということでも頭が痛かった。結局は、南太平洋から遠い日本に居る分だけ、はっきりとフィジーの反核政権の回復の必要性を主張するのがよいと腹をくくっていた。



会議の運営委員会は、クーデター反対派で古くからフィジー非核化の活動が続けて来たフィジー反核グループ(FANG)と昨年の四月のパバンドラ労働党連立政権の成立後に結成された右翼的、人種差別的民族運動であるタウケイ運動の両方に招待状を出した。そして、FANGが拒否し、タウケイが同意して、一時はタウケイのみがマニラ会議に参加するという状況になった。FANGの出席予定者であったジョン・ダグブラ氏は手紙で、タウケイ運動は非核化への敵対者であり出席の資格がないこと、フィジー国内は戒厳令状

態でありマニラ会議でタウケイと出席しても、その後の安全性の保障がなく対等な議論は成立しないことを出席拒否の理由としていた。しかし、マニラに着いてみると状況が逆転していた。タウケイは出席せずジョン・ダグブラ氏が来ていた。この逆転のプロセスは充分につかめなかった。ニュージーランドの平和運動を中心に強力な巻き返しがあったと思われる。

ジョン・ダグブラと何度か話をした。温厚な人物で、静かに、しかし、彼の言葉によれば孤軍奮闘していた。先住民だけの会議ではメラネシア・ポリネシアの純粋民族主義を打ち出しているタウケイ政権に同情的な雰囲気強く、アメリカの戦略や反差別的な理念から事態を見ようとする主張は非常ににくいということであった。アオテアロアの先住民マオリにしてみれば、ヨーロッパの理念は結局のところマオリを少数化して白人が土地を奪ってしまったのであって、一時的なゆき過ぎは先住民の権利を確保するためにやむを得ないと言う。ジョン自身、実はクーデターを起こしたランブカ大佐のいとこで、もちろんメラネシア・ポリネシア系であった。彼は、熱心にパバンドラ政権こそ本当にメラネシア・ポリネシア系の不可侵の権利を保証し、しかもインド系との人種 対立を越える新しいフ

イジー社会に一步を踏み出す政権であったと力説した。

ジョンは、フィジーで拷問が始まっていると話をし、その事例のリストをくれた。そしてフィジーが国連軍に三千二百人も兵を派遣しており、その報償金(一年に五百万米ドル)がタウケイ政権の重要な資金源になっていることを訴え、国連にこれを止めさせるキャンペーンをしてほしいと語っていた。

さて、マニラ会議はフィジーに関してどのような決議をあげるかを巡って実についていない議論をした。ロバティ事務局長は、各国、そして国の中で議論がまとまらないならば各グループが必ず発言をするように要請し、プログラムには無かった議事を設定した。そして、決議の中の「第五回非核独立太平洋会議は、a 政権をとる手段としてのフィジーの軍事クーデター、b 政権を行使する手段としての軍事独裁……を非難する」という個所が投票に付され、アオテアロアなど三ヶ国が棄権をして採択された。日本の代表団には、現政権を認めない趣旨をもっと明確に出すべきだとの強い意見もあったが、決議に賛成する道を選んだ。

反トマ運動ではフィジー事態の大切さを訴え、文献紹介や学習会をして来ていたので会議ではそれが大へんに役に立った。(了)

## ハリスバグの タンポポ

昨年九月二十六日から十月三日までニューヨークで開催された第一回核被害者世界大会に参加した。

この大会で感じたことを、昨年流行の俵万智風に表現してみると次の二つの短歌になった。もちろん俵さん程の才能がないことは皆さんよくご存知のことですが。

「日本は唯一の被爆国」なんて、  
世界に向かって言ってしまったいいの?」  
「核戦争みんな死ねばこわくない」な  
んて言ってくれるじゃないと思う」

アンコールに聴いてもうひとつ。

「怒るより折れ」と君がいうから

八月六日は平和祈念日

折っていれば戦は終わるの?」

大会には、広島・長崎の被爆者をはじめ、被爆兵士、核実験の風下住民、ビキニ環礁の核被害者、スリーマイルやチェルノブイリの放射能被害者、原子力施設の労働者、ウラン採掘などで被害を受けている先住民、そして科学者、医師、さらに弁護士らが参加、それぞれの立場から核被害の実情を訴えた。

この大会での核被害者の証言などは、週間誌やミニコミなどで多く紹介されているため重複しないようにしたい。

九月二十七日、大会参加者は国連近くの公園にむけてデモ行進をした。横文字のスロー



ニューヨークでのデモ行進

# 核被害者世界大会に参加して

原発はごめんだヒロシマ市民の会

代表 木原貞治



ガンが並ぶ中で、見慣れた「原発絶対反対」と日本語で書かれたハチマキをしたメアリー・オズボーンさんがいた。

メアリーさんでは、記憶に無いかもしれないが、TMI事故の現在を訴えるため、放射能の影響で普通の三、四倍の大きさになったタンポポの葉をもって、今年の三月から四月にかけて日本各地をまわった、ハリスバーグの主婦。

ハリスバーグの彼女の家に泊めてもらった。タンポポの葉だけでなく、おしべのない花、片方向のふくらみのない葉、二つの花がくっついたヒマワリやタンポポの花、TMIの事故の風下に多く発生しているガンなどの恐ろしい深刻な話を聞いた。

「いま見られる植物の異常は、私たちへの警告なのよ」とメアリーさんはいった。米エネルギー省や州政府などは、事故で漏れた放射能は低レベルで少量と言っており、健康調査や環境調査もいままお行われていない。

八・六には彼女らのグループはTMI原発のあの川に、ヒロシマ・ナガサキ・ハリスバーグデイとして、日本流のとうろうを流したとか……。

「日本へ来ていて、どういう日本語を覚えている？」と聞いたら、ただ一つだけ「ガンバロウ」だと笑いながら答えてくれた。

## ゼリー・ベイビー……

核被害者の報告の中から、「ゼリー・ベイビー」という言葉を何度か聞いた。ヒバクシヤから生れた子供で、形態をなさないで死産という形で生れる子」のことである。

一九五二年の南太平洋での英国核実験に参加した退役軍人のグレイさん（五十七才）は「一九五五年に最初の子供が生まれたが、ゼリー・ベイビーだった。その後生まれた三人の子供も、長女はお腹に穴があいていた。あとの二人も奇形だった」と発言。

グレイさんの知人の退役軍人の子供にも、指の全然ない子供、身体の一部が青くなった子供、鼻のない子供が生まれているとの事。

英国核実験退役軍人協会で、退役軍人の子供



大きなビルにあった「核シエルター有り」のマーク

一五〇〇人を追跡調査した結果、四百五十二人から「身体障害や知恵遅れ」などの「異常」が発見されている。

グレイさん本人の歯もほとんど抜けている。しかし彼自身四、五年前まで、核実験で被害が出るなど知らなかったようだ。

大会中に、低線量放射能の研究で有名な口ザリー・バーテルさんらの医師グループが、ヒバクシヤの血液検査をやっていた。人指し指の先からチクッと針のようなものをさして少量採血する。その後念入りの問診。耳からとるのと違って、針をさしたとき痛いこと、痛いこと。

ネバダの核実験の風下住民と言われている人が何人かいたが、なんと全員に白血球異常が認められた。

十一月九日、国際電話がかかった。米国ユ

## 世界大会 ヒロシマデー

大会の中で日本の二、三人の被爆者が「我々は唯一の被爆国民として……」と発言した。この場は、核被害者世界大会である。そして「惨劇の様子」が語られる。ヒロシマは過去形の核被害を語るだけでいい。現在進行形の核被害に応えなくては……。

九州セントジョージに住むクロディア・ピーターソンさんの次女ベサニーちゃん（六才）が死んだと。

泣きながらの電話の声は、核実験風下の核被害者グループ「シチズン・コール」の代表ジャネット・ゴードンさん。ベサニーちゃんは、神経ガンだった。母のクロディアさんが大会の中で、「私は小さい時に何度も核実験を見ました。私たちはモルモン教徒で、タバコもコーヒーものみません。ベサニーのガンの原因は核実験の影響以外に考えられませんか」といつていたのを思い出す。

広島はヒロシマの声を世界に伝えることはやっているかもしれない。しかし、世界の声をヒロシマに伝えていないのではないだろうか。核被害者世界大会の中で、強く感じた。

大会には、米国に住んでいる広島・長崎の被爆者の姿がなかった。米国には推定で、一〇〇〇〇人程度の広島・長崎の体験者がいるとされている。ほとんどの人が、西海岸のサンフランシスコやロスアンゼルスに集中しているのだが、この人達の状況を現地に聞いた。精神的にも物理的にも追いつめられた状況に涙が出た。

医療費に莫大なお金がかかる。被爆者とかれば、保険に加入させてくれない。だから一日病院へ行ったら六百ドル、入院すれば一日二千ドルはかかる。手術でもしたらすぐに一万ドル以上の出費になるという。日本政府は、外国に住む被爆者には何の対策もしていない。

一般的米国人からは、あらわにパールハーバーと言って敵意あらわにされる。平和団体からは、デモの先頭に立つてくれと言われ、一方核推進者からは「放射能の被害を受けたが、このように元気に生きている」と証言してくれと頼まれるという。

ニューヨークの街は、貧乏と金持ちそしてさまざまな人種の混在するところである。大きなビルのほとんどに「FALL OUT・SHELTER」の小さな看板がついている。核シエルター完備ですよ！という印である。そして犯罪の多い街だから、セキュリティ



ベサニーちゃんの母クロディアさん

イ（安全）という言葉を使っているところまで耳にした。例えば、このホテルはセキュリティ・チェックがされているとか、アパートはセキュリティのため何重もの鍵をしている。セキュリティ、セキュリティで他人が信用されなくなり、セキュリティのため核兵器を開発したことが、世界中を不安定なものにしてしまったのか！

核実験・ウラン採掘から原発事故まで、平和と軍事とを問わず、あらゆる「核の過程」で生まれた核被害者は、一六〇〇万人にのぼるという。

## 会計報告

(87.12.18 ~ 88.1.16)

## 〔収入〕

○前月からの繰り越し  $\Delta 454,596$ 
 内 経常繰越  $10,404$   
 訳 借入金繰越  $\Delta 474,000$ 

○会費収入 134,000

 内 維持団体 58,000  
 維持個人 0  
 参加団体 24,000  
 訳 参加個人 15,000  
 通信会員 37,000

○カンパ 95,400

○反核ホットライン 3,000

(会費、パンフ売り上げ)

## &lt;計&gt;

 $\Delta 222,196$ 

## 〔支出〕

●家賃 40,000

●電話代 4,000

●郵送費 53,170

●印刷費 34,000

●会場費 11,500

●行動費 5,000

●雑費 860

●反核ホットライン経費 32,000

●手数料(郵便振替) 2,570

●借入れ金返済 48,000

●次月への繰り越し  $\Delta 403,936$ 
 内 経常繰越  $22,064$   
 訳 借入金繰越  $\Delta 426,000$ 

## &lt;計&gt;

 $\Delta 166,096$ 

などなど

●1988.5.X ●横須賀(予定)

■海の軍備撤廃のための国際週間(「モンデイト'88」)

●1988.3.6 ●東京・文京区民センター

■北西太平洋反核国際シンポジウム

ピース・スピリット

核の海から  
生命の海へ
 海外ゲスト ●ベラウ、フィリピン  
 韓国から 開場 ●10時半 ●開会 11  
 時 参加費 ●1500円(高校生以下  
 割引あり)

PEACE SPIRIT '88

核の海からいのちの海へ

2・28-5・31

よびかけ  
'88.1.11  
現在
 アジア太平洋資料センター  
 トマホークの配備を許すな! 全国運動  
 日本カトリック正義と平和協議会  
 日本キリスト教協議会・平和委員会  
 日本はこれでいいのか市民連合  
 日本YWCA強調点委員会  
 反核1000人委員会  
 婦人民主クラブ  
 平和事務所
問合わせは  
トマ喰虫社へ

月刊反トマホーク通信 No 27

\*発行 一九八八年一月二〇日発行  
トマホークの配備を許すな全国運動東京都渋谷区渋谷二一五一九パル  
青山五〇二 トマ喰虫社

〇三(四九八)六〇九五

〇四四(六三)五一〇一

\*編集 反トマホーク通信編集委員会

\*定価 一〇〇円(通信会員年間二〇〇〇円)